

# HELLO PSJ

## 初めての海外，そして長期滞在

Center for Oral Biology, University of Rochester Medical Center 中本 哲自

突然の転機,それは2002年4月(日本生理学会, 広島)でした。当時,大学院を修了して3年目を迎え, 大学を離れ, 研学生活から距離を置き, 愛媛県松山市で歯科臨床に従事していましたが, 研学生活への未練もあり, 人生の選択を迫られていました。その間も広島大学大学院の恩師からは, 研学生生活を再開できるようご配慮いただきましたが, 優柔不断な性格が災いし, もう一步踏み出せずにいました。学会会期中, 自分の心の中でももしも留学するならここ, と第一候補として考えていた, University of RochesterのDr. James E. Melvinのラボが人員募集しているとの情報が日本大学松戸歯学部杉谷博士先生から恩師にわたり, さらに学会後, 自分へ回ってきたのでした。その出来すぎた偶然に, 具体的な募集内容も確認しないまま飛びつきました。紆余曲折は有りましたが, 運良く採用され, 2003年2月, 片道チケットで極寒のニューヨーク州ロチェスターに辿り着いたのでした。(NY州, ロチェスターについては, 以前この稿に書かれた佐藤暢哉先生の記事をご覧ください。)

しかし, 採用可の通知をもらうまで, パスポートすら持っておらず, 初めての海外が, 旅行や学会参加の短期滞在でなく, 実際に暮らし始める暴挙でした。事前にインターネットで当地の情報をわずかながら入手していましたが, 現地の日本人を探して連絡を取りながら生の情報を集めたわけではなかったのです。ポスの配慮で大学寮内の部屋に住めなければ $-20^{\circ}\text{C}$ 以下になる厳冬を乗り切れなかったでしょう。幸運にも職場の人が優しく, また国際オフィスの仕事がしっか

りしていたため書類手続きなども無事に進めることができました(9.11以来, 小変更が度々あるので国際オフィスの仕事が正確であることは重要です)。仕事面では, テクニシャンから「実験をするのは自分たちの仕事, お前は指示を出して結果に責任を持て」と言われ最初は頭を抱えました。さらに, ポスのグラントの申請書類に記載してあるテクニシャンの給料を見て, その高給ぶりにさらに落ち込みました。それなりに時間は必要でしたが, ラボの一員として効率よく稼働させることができるようになり始めてみれば, 残業をさせない配慮という苦労は未だにありますが, 置かれた環境が自分の性分に合っており, ポスドクからの昇進と2度の契約更新を経て, ついに先日5年目に突入しました。

自分が所属するDr. Melvinのラボは, チャネル( $\text{K}^+$ チャネル,  $\text{Cl}^-$ チャネル, アクアポリン)や輸送体( $\text{Na}^+/\text{H}^+$ 交換輸送体,  $\text{Na}^+-\text{K}^+-2\text{Cl}^-$ 共輸送体)などのトランスジェニックマウスの唾液腺組織を用いて生理学的, 生化学的手法でさまざまな解析を行っています。最近ではそれらに加えてウイルスベクターを用いた機能回復にも着手しています。ポスの方針から学生と大学院生は基本的に取らず, リサーチアシスタント, ポスドク, テクニシャンで稼働しており, 各研究者に別々のテーマが与えられるのではなく, 得意分野に専属で実験をしています。たとえば生物物理学者がウェスタンブロットや組織染色などに多く時間を割くことは特段の理由がない限り, 当ラボではまずありません。自分は*in vivo*の実験から細胞内蛍光測定(主に細胞内イオン濃度測定)まで, 電気生理を除



Center for Oral Biology で唾液腺の研究をしているメンバー、生理学、生化学、発生学の3つのラボより構成される。上段、左より2人目が当センター長でもある Dr. Melvin、左端が筆者。

いた生組織あるいは生細胞レベルでの機能解析を担当しています。特に最近では、生理学研究所の村上政隆先生より貴重なアドバイスをいただき、従来ラットで用いられた灌流顎下腺をマウスに应用到することに成功し、トランスジェニックマウスを用いてさまざまな輸送体および受容体の解析に多くの時間を割いています。マウスの種類が多く、常に実験を稼動させていますが、他の雑務を他の人がこなしてくれるので快適な環境の下で研究をしています。

初めての海外生活であったため、渡米前の想像と現実が違っていたことはたくさんあります。勤務時間は定時で土、日曜日は休みと思っていたところ、特定の人に限られますが、平日は夜遅くま

で、休みの日も仕事をしている人達がたくさんいます。また、宗教観や政治の話は良い人間関係が構築されてから、と考えていたら初対面の学生から輪廻転生について聞かれて冷や汗をかいたこともありました。周囲の人は話題づくりが上手で、渡米前に専門分野の知識だけでなく、日本の文化や歴史について勉強しておくべきだったと後悔しました。理系の人間としては認めるのは悔しいですが、日常会話を潤すのはやはり文系の知識のようです。

アメリカの人口が3億人を越えたという先日のニュースをご記憶の方も多と思います。それだけ多いと研究者も種々雑多です。大部分が論理的で切磋琢磨している研究者ですが、サイエンスを介した相互理解、という美辞麗句など通用しない人も少なからずいます。想像の範疇を超えている人も多く、そのため、心の間口を常に広く保つようになりました。また、一番の財産は、自分のような凡人が専門分野の一流研究者だけでなく、さまざまな分野で高い志を持って米国へ来ている日本人から刺激を受けたことです。日常生活の不都合や経済的な苦勞など、決して良いことばかりではありませんが、健康に自信が有り、やりたい事がそこにあれば、現状を打破するために海外に出てみるのも面白いと思います。

最後に、当ラボに興味がある方、常時募集しているわけではありませんがポストドクとして仕事をしてみたいと思われる方、下記 Web ページをご覧の上、ご連絡をいただけましたら幸いです。

<http://www.urmc.rochester.edu/Aab/OralBio/>